

2012 年度第 8 回全体研究会
「エンゲイジド・ブディズムの潮流」 （第 5 回）

（共催： 龍谷佛教學會）

報告題目	仏教と現代
開催日時	2012 年 11 月 20 日（火）15：00－16：30
開催場所	龍谷大学大宮学舎本館 2 階講堂
報告者	上山大峻（龍谷大学名誉教授・元学長）
参加者	124 人

【報告のポイント】

上山氏は、青年期、仏教の将来に疑問を感じ、寺院の後継者であることに悩んだことを回顧し、今日においても仏教が「和」を基礎とする、優れて日本的な社会形成に機能している事実を明らかにし、現代における仏教の可能性を再検討すべきであると提言する。

【報告の概要】

上山氏は、まず青年期に仏教の将来性についての不安から、寺院の後継者であることに悩んだことを披瀝した。その不安の一つは、第二次大戦後に起こった社会主義思想のもとでは、生産性のない宗教の存在が批判され否定される傾向にあったことである。いま一つの不安は、このまま科学が進歩すれば、人間のもつ生老病死の苦悩が解決され、仏教の存在理由が無くなるのではないかということであった。事実、科学的思考の普遍化によって、仏教の成立基盤とも言える地獄・極楽の実在性を信じるものが無くなっていった。

現代における仏教の役割について確信の持てないまま龍谷大学に入学し、仏教学を学んだが、そこで選んだものは最終的には敦煌仏教の史的研究であって、自他の救済をめざす宗教的な仏教学ではなかった。客観的に仏教の教義や歴史を明らかにする科学的方法による研究作業は、仏教を知る上の基礎的研究で重要ではあるが、仏教のもつ宗教としての自他の救済という本来の目的から逸れるところがある。それでもなお歴史研究に留まったことは、結局は仏教者としては「逃げ」ではなかったかと、自からの学問姿勢をふり返った。

続いて上山氏は話題を変え、日本人の生活や考え方には、今でも仏教思想が浸透しており仏教は個人的救いをめざす宗教的役割だけでなく、「和」を基軸とする社会の形成にも

大きな役割をはたしている。このたびの東日本大震災で日本中に湧き起こった「他への思いやり」の心情は、外国人の称賛によってはじめて気づいたことであったが、人と人とはお互いに関係し合って生きている、自分だけの問題ではないという認識は、仏教の縁起の教えの実践にほかならない。このような仏教の社会性については、これまであまり注目されることがなかったが、もっと仏教の重要な機能として注目されるべきであると述べる。

その他にも、「生命の重視とその平等性の認識」、「争いを避け和を重視する」、「真実に照らして誤りを正していく如実知見の認識方法」、「煩悩性の制御」、「法灯明・自灯明の教えによる脱権威性・自立性」、「自己の煩悩性への反省」などの価値観や思考習慣が日本人には見られるが、仏教の教育によるものである。

最後に、約 1500 年の長いあいだ仏教とともに育まれてきた日本人の心性について、その優れたところを選択し伸張させるとともに、今日にあってはもはや排除できない科学などの現代的思想とどのように融合させていくか、その可能性について検証し判断していくことが必要である。そしてそれは「仏教学」の役割であると述べた。

